

武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科国際コミュニケーション専攻
修士論文

修士（国際コミュニケーション）取得者数

2009年 3月	4名	2013年 3月	5名	2016年 9月	10名	2020年 9月	3名
2009年 9月	1名	2013年 9月	4名	2017年 3月	6名	2021年 3月	2名
2010年 3月	7名	2014年 3月	5名	2017年 9月	5名	2021年 9月	0名
2010年 9月	6名	2014年 9月	1名	2018年 3月	2名	2022年 3月	1名
2011年 3月	6名	2015年 3月	6名	2018年 9月	4名	2022年 9月	2名
2011年 9月	4名	2015年 9月	3名	2019年 3月	1名	2023年 3月	1名
2012年 3月	7名	2016年 3月	4名	2019年 9月	6名	2023年 9月	4名
2012年 9月	2名			2020年 3月	4名	2024年 3月	1名
						2024年 9月	2名
						2025年 3月	4名
小計	37名	小計	28名	小計	38名	小計	20名
						合計 123名	

2025年 9月	1名
2026年 9月	2名
小計	3名

総合計 126名

2025年 9月

3124201 Ma Le ジェンダーの視点からの日本語教科書の考察

本研究は、ジェンダーの視点から中国の大学において広く使用されている日本語教科書の内容を分析し、そこにおける女性登場人物の言語使用と社会地位を明らかにするものである。特に、教科書に登場する女性キャラクターが使用する文末表現(いわゆる「女性語」)の出現頻度と、家庭や職場における女性像の描写に注目し、それが現代日本社会の実態とどのように乖離しているのかを考察した。

近年、日中両国の交流が深化するにつれ、日本語を学ぶ中国人学習者が増え続けている。しかし、中国で使用されている一部の教科書は版が古いため、その内容や価値観は時代と乖離していることがあると考えられる。こうした乖離は学習者が、日本社会の現状にそぐわないイメージを抱く可能性がある。そのような誤解を避けるために 現在中国の大学で流通している日本語教科書を見直す必要がある。

そこで本研究は、中国の大学における基礎日本語教育で用いられている『新経典日本語』『新標準日本語』『新編日本語』という三種類の教科書(計 12 冊)を分析対象とし、女性登場人物による文末表現の使用状況、家庭および職場における女性像の描写を調べた。文末表現については、水本(2015)に基づく分析枠組みを用い、「～わ」「～かしら」「～のよ」といっ

た女性文末詞の使用頻度を集計した。女性像の分析においては、会話文をもとに、挿絵、小コラムなどを参考しながら、女性登場人物の家庭役割分担や職場における地位を検討した。

その結果、次の3点が明らかとなった。

第一に、教科書に登場する女性登場人物の発話において、女性文末表現の使用率は依然として高い傾向が見られた。国立国語研究所のコーパス調査によれば、現代の若年層女性の言用において、このような女性文末表現の使用頻度は非常に低く、中性的な表現が主流となっている。したがって、教科書で描かれる言語使用は現代日本語の実態と著しい乖離があるといえる。

第二に、家庭内における女性像については、依然として「家計の管理」「買い物好き」「消費観念が感情に左右される」といったステレオタイプな描写が多く見られた。たとえば、夫婦の会話では妻が家計支出を主導し、夫がそれに従うといった構図が複数の教材に共通して登場する。また、「妻」という登場人物が家で同じようなコーヒーカップがあっても、新商品や季節商品に敏感といった描写も多く、家庭を守る女性が浪費しがちであるといったイメージを示している。

第三に、職業描写の面でも、女性は「パート従業員」「百貨店の販売員」「フライドアテンダント」といったサービス業や非正規雇用の職に描かれており、現代日本における女性の就業構造を反映した職種(例えば、看護師、福祉専門職、公務員、技術職など)はほとんど登場しなかった。このような職業選択の提示は、学習者に対して「女性とはこうあるべき」というジェンダースtereotypeを強化しかねない。

以上の分析から、現行の日本語教科書には、①過去の日本社会を反映した言語表現と、②家庭および職場における伝統的な性別役割の描写が色濃く残っており、現代社会の実態とは大きなギャップがあることが確認された。今後の課題としては、①日本国内で使用されている初・中・上級日本語教科書を取り入れること、②学習者の反応や意識についての調査を導入することなどが求められる。

2026年9月

3124202 LI HUIYUE 日中両国年始行事における民間習俗の比較

本研究は、日本の正月と中国の春節を対象に、両国における年始行事の民間習俗を比較し、その共通性と差異性を明らかにすることを目的とするものである。日本の正月と中国の春節は、いずれも一年の始まりを祝う代表的な年中行事として、それぞれの社会に深く根付いている。しかし、近年のグローバル化の進展に伴い、文化交流が活発化する一方で、隣接する文化圏に属する日中両国の年始行事については、「似ているが異なる」という印象的理解にとどまり、その歴史的背景や文化構造に対する体系的な比較研究は必ずしも十分ではない。とりわけ、民間習俗という視点から両者を比較し、その背後に存在する文化的構造を分析する研究は限られている。そこで本研究では、民俗学的視点を中心に据え、日本の正月と中国の春節における民間習俗を比較することによって、両者の文化的共通基盤と構造的差異を明らかにすることを試みた。

本研究では、まず文献調査を通じて、日本と中国における正月・春節の歴史的形成過程を整理し、その成立背景を明らかにした。その上で、民俗学、文化人類学、比較文化研究の理論を援用し、両者の具体的な習俗内容を比較分析した。分析の視点としては、第一に歴史的展開、第二に民間習俗の共通性、第三に文化構造上の差異性という三つの側面を設定し、それぞれを段階的に検討した。

第一章では、日本の正月と中国の春節の歴史的形成過程を整理した。日本の正月は、古代における年神信仰を基盤とし、宮廷儀礼と結びつきながら発展した後、民間社会へと浸透する中で多様な正月習俗を形成してきた。一方、中国の春節は、古代の歳時祭祀と祖先崇拝を基礎とし、儒教・道教・民間信仰の影響を受けながら現在の形へと発展してきた。両者はともに古代の日中農耕社会において成立し、季節の循環に応じた歳時祭祀、豊穡祈願、祖先・神霊祭祀を通じて共同体の秩序を再確認するという共通の歴史的・文化的基盤を有していることが確認された。一方で、それぞれの宗教観や社会構造の違いによって、その後

の発展方向には相違が生じていることも明らかとなった。

第二章では、日本の正月と中国の春節に見られる民間習俗の共通性について検討した。まず、両者はいずれも自然との交感を重視し、新しい年の始まりを「再生」の契機として捉えていることが確認された。例えば、日本における年神迎えや中国における祖先祭 祀は、人間と超自然的存在との関係を再確認する行為として位置づけられる。また、年末の大掃除や除夜の儀礼、中国の「掃塵」などに見られるように、旧年の穢れや不吉を 取り除き、新年を清浄な状態で迎える「浄化」の思想も共通している。さらに、家族や親族が集まり共に食事をする行為、年始の挨拶や訪問儀礼などは、共同体内部の絆を再確認する社会的機能を果たしている。加えて、おせち料理や餃子、年様などの年始の食文化においても、それぞれの食物に吉祥的意味が付与されている点が共通している。これらの共通性は、単なる形式的類似ではなく、日中農耕社会に共通する自然観・共同体意識・再生思想に基づくものであることが明らかとなった。

第三章では、日本の正月と中国の春節の差異性について、宗教的基盤、社会構造、時間意識、具体的習俗表現の四つの観点から分析を行った。宗教的基盤の面では、日本の正月は神道的世界観を背景に「穢れの祓い」と「年神迎え」を中心とする受容的構造を持つのに対し、中国の春節は儒教・道教・民間信仰の複合体系のもとで、「趨吉避凶」を目的とする能動的構造を持つことが確認された。すなわち、日本では神の来訪を待つ姿勢が重視されるのに対し、中国では人間が積極的に吉祥を呼び込み、不吉を排除しようとする傾向が強い。

社会構造の面では、日本の正月が氏神を中心とした地縁共同体の再確認を重視するのに対し、中国の春節は血縁を中心とした家族・親族関係の再統合を重視することが明らかとなった。この違いは、日本社会における地域共同体の重要性と、中国社会における家族中心主義の強さを反映している。

さらに、時間意識の面では、両者とも一定期間にわたる儀礼体系を有している点では共通しているものの、現代社会における時間経験には差異が見られた。日本の正月は大晦日から正月三日にかけて主要儀礼が集中し、公的休暇も比較的短いため、「凝縮型」の祝祭として経験されやすい。一方、中国の春節は法定休日が長く、帰省や親族交流も元宵節頃まで継続することから、「展開型」の祝祭として経験される傾向が強いことが明らかとなった。

以上の分析を通じて、本研究では日本の正月と中国の春節を「同源異相」という概念によって捉えることが可能であることを示した。すなわち、両者はともに古代の日中農耕社会に由来し、自然循環への対応、豊穰祈願、共同体秩序の再確認という共通の文化的基盤を持ちながらも、それぞれの宗教観、社会構造、価値体系の違いによって異なる文化的表現へと展開してきたのである。

本研究の意義は、従来の研究が主として習俗の表面的類似性に注目していたのに対し、その背後に存在する文化構造の差異を明らかにした点にある。これにより、日本文化と中国文化を「似ている文化」として捉えるだけでなく、その内在的な価値体系や思考様式の違いをより深く理解することが可能となった。また、本研究は日中比較文化研究の一事例として、東アジア文化圏における共通性と多様性の理解にも一定の示唆を与えるものである。

一方で、本研究にはいくつかの課題も残されている。第一に、日本国内および中国国内における地域差を十分に扱うことができなかった点である。第二に、近年の都市化や商業化、グローバル化が伝統的年始行事に与える影響については、さらに詳細な分析が必要である。今後は、地域研究やフィールドワークを通じて、より具体的な実践の差異を明らかにするとともに、東アジア全体の年中行事との比較へと研究を発展させていく必要がある。以上のように、本研究は日本の正月と中国の春節という二つの年始行事を比較することによって、日中文化における共通性と差異性を多角的に明らかにし、異文化理解を深化させるための新たな視点を提示することを目指したものである。今後の日中比較文化研究において、本研究が一つの基礎的資料となることを期待したい。

「スポーツアニメの一考察：スポ根を意識して」は留学生から見た視点からのものである。

「序論」では筆者が中国からの留学生ということから、中国のスポーツ事情を紹介した。当初は第1章として中国のスポーツ事情を組み入れていたが、日本のスポーツとスポーツアニメに内容を絞ったため、直接、本論文との関わりはないものの、筆者のスポーツに対する背景として序論に組み入れた。中国と日本では人気のあるスポーツは若干異なる。典型的なものとしてはバドミントンである。中国では競技スポーツというよりは日常的に楽しみスポーツとして、公園などでバドミントンを楽しむ機会が多い。気軽にできる点が人気となっている。また、日本ではそれほどではない。日本のスポーツアニメは日本のスポーツ事情と大きく関連していると思われる。

日本と中国のスポーツ事情は異なるが、中国の若者が日本のスポーツアニメに寄せる関心度は高い。筆者はこうした中国のスポーツ事情の中で育った経緯がある。

「第1章 日本スポーツ事情」では1964年の東京オリンピック、その後の野球、バレーボール、サッカー、バスケットボールなどの普及振りを辿った。2011年に成立したスポーツ基本法の前文によれば、スポーツとは「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」とある。

本論文では「スポーツとは何か」を考察するのではなく、スポーツアニメと実際のスポーツ、学校における部活動との関連性について取り上げる。

「第2章 日本の学校教育の部活動」では第1章とも関連するが、中学・高校生の運動部におけるスポーツに注目した。日本のスポーツアニメは中学・高校生の部活動が中心になっているものが多い。スポーツ根性ものと学園ものといったアニメのジャンルがあるだけに、実際の部活動の様子についても着目した。日本の部活動の在り方にも変化が生じており、スポーツ庁からの発信に注目した。

「第3章 スポーツアニメ」では、日本のスポーツアニメ史を辿りながら、実際のスポーツ事情とも関連しながら、スポ根ものの原点やスポ根とはなにかに注目した。新澤健二・栗田義秀・関根弘美編『日本TVアニメーション大全』（2014）をはじめ、特に「スポ根」については先行研究として辻秀一『新「根性」論 ～「根性」を超えた「今どきの根性」』（2009）、岡部祐介・友添秀則・春日芳美「1960年代における「根性」の変容に関する一考察東京オリンピックが果たした役割に着目して」（2012）、岡部祐介『スポーツ根性論の誕生と変容卓越への意志・勝利の追求』（2021）などを参考にした。

「第4章 部活動を通じたスポーツアニメ」では『SLAM DUNK』（バスケットボール）、『テニスの王子様』（テニス）、『ハイキュー!』（バレーボール）を取り上げた。中国では野球が日本ほど人気が高くなく、筆者も野球アニメをほとんど見ていないということもあり、日本でも中国でも人気のあるバスケットボール、テニス、バレーボールに特に注目した。2011年に成立したスポーツ基本法の前文によれば、スポーツとは「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」とある。本論文では「スポーツとは何か」を考察するのではなく、スポーツアニメを実際のスポーツ、学校における部活動との関連性を意識し、筆者が中国からの留学生ということから中国にはない部活動がスポーツアニメで大きなウエイトを占めていることも関心を寄せている。

本論文により、日本のスポーツアニメが単にスポーツを描いている以上に、日本の中学・高校生の部活動を通じた学園ドラマという背景を持ちながら、スポーツに熱中する中学・高校生の姿がアニメでどのように描写されているのか、スポーツアニメは実際のスポーツや部活動がどのように反映されているのかなど、いわゆるスポ根を強く意識して留学生から見た日本のスポーツアニメの持つ魅力と可能性を明らかにするものである。